

総合大学での学修成果評価

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学教育研究センター 公開日: 2022-03-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 文彦 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20220318-009

Title	総合大学での学修成果評価
Author	橋本, 文彦
Citation	大阪市立大学大学教育. 19 巻 1 号, p.62-67.
Issue Date	2022-03-31
ISSN	1349-2152
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学教育研究センター
Description	
DOI	10.24544/ocu.20220318-009

Placed on: Osaka City University

総合大学での学修成果評価

橋 本 文 彦
大阪市立大学 副学長

よろしくお願いいたします。画面共有させていただきます。改めまして、大阪市立大学副学長の橋本です。

はじめに

私自身も——もというか、もともとは教育というのは専門分野というわけではありませんので、教育をどう評価するのかなとか、そういうことを偉そうに言うところではないんですけども、この10年くらい、大学教育研究センターの先生方のご支援のもとというか、唆されてというか、担がれてというか、いろんな状況があり、そこで大阪市立大学での学修成果をどのように計測し、あるいは学生・教員がそれをどう活用できるのかなということを考えてきました。

本日は、その考え方ということと、それに沿ってやってきたことをお話しさせていただきたいと思います。

今までのFD研究会で、私も何度かお話しさせていただいてきたのに比べて、ものすごくたくさんの方が、まさにオンラインのいいところなのかなというふうにも思いますし、府大の教職員の方々が参加していただいていること、非常に多くの方がいらっしゃっています。大勢の前でしゃべるのはそもそも苦手なんですけれども、それと、OCU指標についての説明を、具体的な説明はもう大抵の人が、知っている人しか来ないかなと思って、あまり詳しいことを用意してないんですけれども、補足しながらお話ししていきたいと思います。

本日は、まずこのような流れで（章末スライド2参照）お話をさせていただきたいと思いますが、PE指標を一番最初に出しています。これは、大阪市立大学の経済学部が育成を目指してきている、プラクティカル・エコノミストということに関する指標です。

OCU指標はOsaka City University指標ということで、これらをはじめとして、その後の本学の教育評価をどのようにこれまでやってきたのか、それから、これからどうするのかということのお話をさせていただけるかと思います。

1. PE (Practical Economist) 指標前史

まず、PE指標、今申しました、プラクティカル・エコノミスト指標の前史と書きましたが（章末スライド3参照）、経済学部では、学士課程でどういう学生を育てるのかということに、ちょっと文字の小さいほうで書きましたように、経済学部では、特にほかの学部、幾つかの学部のように何か資格を取るとか、特定の職業に就くとか、そういったものがなくて、「4年間で一体何をすれば？」という問いに、満遍なく勉強しましょうではちょっと、どこを目指せばいいのかも分かりにくいということで、プラクティカル・エコノミストという考え方を掲げました。

ここで言うプラクティカルというのは、実用的というだけの意味ではなくて、日々直面する課題に対して実践的に適切な判断を下すことができる、そういう人間であると。経済学の観点から、自分が直面する、毎日直面する、そういう課題に実践的なことを判断できる、それを育てたいということで用いています。

では、それをどうやって育てるんだということが重要な問題になります。目標は掲げたけど、それはどうやって育てるんですかということで、もうちょっと具体的に、実際にGPで、プラクティカル・エコノミストというのは、こういう能力を持って、ああいう能力を持っていて、それもまた書けますけれども、じゃあ、それを一体、いつ、どんな科目で、どの程度身につけ

るのかということをきちんと伝えないといけないという問題が残りました。

2. PE指標の開発

その、いつ、どんな科目で、どの程度プラクティカル・エコノミストに必要な能力を身につけるのかということをちゃんと考えようというあたりで、文科省のGP事業、Good Practiceの事業が公募されていて、その目的が我々の考えと合っているらしいということで、経済学部からも応募しようかということになりました。

これは後で何回も述べますし、いつも言っていることですけれども、私自身はずっと、自分たちがやるうとしていることが、たまたま募集されていれば、文科省もなかなかいいこと考えてますねということで応募はしますけれども、公募されている補助金があるから、これをもらうために何かしましょうかというような形では決して応募しないというふうに考えています。

このときも、どうせやろうと思っているから、落ちてもいいんだけどということを思いながら、あまり落ちてもいいけどを繰り返すと、どこかから怒られるかもしれないかもしれませんが、そう思いながら、それでもいいものを作ろうというふうに考えておりましたところ、「どの科目で、どんな程度、その必要な能力を身につけることができるかというの、何か指標のようなものがあるとよいですね」と大教センターの先生から言われましたので、「じゃあ、作りましょう」ということで、私がPE指標というものを作成しました。(章末スライド4を参照)

この指標の特徴というか、考えたことは、まずAとして、学生自身が、今までの、1年生、2年生、3年生、4年生となるに従って、大学生活で自分にはどのような能力がどの程度身についたのかを知り、また自律的に今後の学修を選択できる、そういうものにした。学生にとっていいというだけではなくて、次にBとして教員のほうも、自分たちが提供しているカリキュラムが本当に意図どおりに学生に受け取られて、卒業するまでに学生がちゃんと教員側が思っていた能力が本当に身についているのかということを知りたい。学生にとっても自分の状況を今知る、教員にとっ

てもカリキュラムの状況を知ることができるということを考えました。

実は、これはOCU指標にも受け継がれているものです。

ただし、これをやるのに、教員にも学生にも従来以上の労力はかけたくないというふうに思いました。

当時、例えば他大学では、一つの科目ごとに、論理的能力は何点、何とか能力は何点って区分して採点するようなことを提案されているところもありましたが、それだと手間がかかり過ぎるということで、PE指標は、1回教員が通常どおり採点をすれば、その採点成績に従って身についた能力が変わると、きちんと自動的に計算されるというものを作りました。

詳しいことは『4年一貫の演習と論文指導が育む学士力』というような冊子にまとめてありますので、またこれ、公開されているものですので、ご覧いただければと思うのですが、例えば、これはまず科目ごとで、どの学年でどういう科目を履修すると、ファースト・スキルとか、セカンド、ちょっと字が小さいですけども、サード・スキルと、いろいろな能力が、ずうっと学年が上がるに従って、どの科目を取ると、どういうものが身につくという概念図です。

それから、もうちょっと具体的に言うと、例えばですけれども、基礎演習という科目は、これは当時ですけれども、情報収集を4ポイント、プレゼンテーションについては3ポイント、問題発見については1ポイントだけ、分析も1ポイント、論文というふうに、基礎演習という科目で身につく能力は、問題発見や分析、論文執筆はあんまり大きくないんだけど、情報収集というのを中心にやってますよ、身につきますよとかですね。

演習4という科目は、情報収集、プレゼンテーションはもう終わって、分析と論文執筆能力が身につきますよというふうに、各科目に配分しました。その科目ではそれぞれの能力がどのくらい身につくかということ配分した上で、これに先生は今までどおり成績をつけると、その成績がここに書かれた配分に従って割り振られると。それによって、各学生は何ポイント、どのくらい身についたのかということが分かって、最後に六角形の形で、これは平均累積のグラフですが、

一人一人の学生がどのぐらいどの能力が身についたかを見ることができるというようなものでありました。

3. OCU指標（夢）

このPE指標は、ここに（スライド6に）書きましたように、その名のとおり、経済学部の特化した特殊固有の指標でありました。PE指標では、多くの単位を取れば取るほど六角形の形が大きくなるとか、各能力、スキルといったものを満遍なく身につけて、正六角形に近づくほど、最終的に一つのPE指標が高くなる。つまり、単位をたくさん取って、六角形が満遍ない形になっていたら、それがいいというようなことでしたけれども、これは経済学部特有のものだということで、OCU指標というのはもうちょっと一般化したいということと考えました。

実際には、まさに大阪市大でも、多様で総合的な学部・学科を擁するものですので、それぞれに特有の指標というのも考えられるのですが、それぞれに特有なものではなくて、その多様さをパラメーターの変化で吸収して、その多様も含めて測れる、そういう指標を作りたいと考えて、2015年のこのFD研究会で「OCU指標（案）」って書いてからバツテン（×）して「（夢）」と書いて、スライドで報告しました。

科目ナンバリングを利用して、科目ごとに成果配分を行うとか、正六角形がいいんじゃないかと、どんな形でもいいから、各学部が理想とする、あるいは学生がそういう能力を身につけたいと思う、その理想型のために、科目ナンバーをもとに自分で自律的にどんな科目を次に履修しようかと選択できる、そういったものを作っていました。

これもまた当時、募集されていた文科省のAP事業と整合しそうだったので、じゃあ、これ応募したら通るのではないかとということで応募したところ、予想どおり、予定どおり採択されたということになります。

ただ、今申し上げてきましたOCU指標は、あくまで本学の教育評価における一つのツールでしかありません。それでは、ほかに何をもって——これも、すみません、画面、小さいものですが、この表については、OCU指標はどういう位置づけで、ほかにどういった測定指標があるかということは、後で飯吉先

生のほうから詳しく説明いただけるかと思います。（章末スライド7を参照）

私のほうでは、このスライドの中の、こういったOCU指標のレーダーチャート、またこれもファイルは皆さんのほうに後ほど行くと思いますので、OCU指標についての説明は今までこの研究会では大分しゃべってきたことですので省略しますが、ご存じない方は、また見ておいてください。

ただし、今はこれはOCU指標で、新大学では、いろいろな議論を重ねながらOMU指標というものを今後、策定していきたいというふうには考えております。

4. 教育評価方針と教育評価計画

このように、OCU指標は本学の教育評価における一つのツールでしかないということですが、じゃあ、どんな教育評価をどんなふうな計画でやるのかと。

まず、何を知るために、何を測定するのか。教育目標としているその能力が本当に身についているのか。OCU指標だけではなくて、きちんとカリキュラムが回っているのかとか、何を調べればいいのか。

それから、どんな間隔でそれを調査すれば、毎年、全ての調査をするというのはコストがかかり過ぎますので、どのぐらいの間隔でやればいいのかというようなことを考え、2017年に本学の教育評価方針と教育評価の計画を策定いたしました。（章末スライド8と9を参照）

これも公開しているものですので、評価方針として、例えば「OCU指標を導入する」とありますけれども、OCU指標以外に、どういった成績関連指標を測定して、実際の学修がきちんと行われているのか、まさに内部質保証ということですが、質保証できるのか、どんなふうに達成できているのかということを調べますという、その方針です。

それから、何年度にどんなことをやっていきますよということをきちんと、あらかじめ計画すると。それ以前には、認証評価が今度あるから、何か調査しないといけませんねと、大慌てでやるというふうなこともあったのですが、そういうことはやらないで、きちんと毎回、計画的に調査をしておきましょうということで進めてきました。

こういった全学での調査は、教育推進本部長からの委嘱を受けて、大教センターのほうで実施していただいているというようなものであります。

5. 内部質保証WGとIR室の設置

この調査と関連して、本学では、様々な評価をもとに、全学及び各学部での質保証を円滑に行うためにIR室を設置して、また教育の内部質保証ワーキングというのを立ち上げました。全学の主催である調査については、IR室による分析と提言。各学部・研究科の個別特徴についても、学部ごとに細かな分析をしたいということがありますので、それはお任せする上で、改めてIR室が支援するという形をとっています。(章末スライド10を参照)

また、各学部・研究代表からなる内部質保証ワーキングというのを作りまして、各学部の中にも内部質保証を担当していく先生方を決めていただいて、それを進めていくという形でやります。(章末スライド11を参照)

ただ、これはちょっと理想的なところでありまして、IR室の支援等も、IR室長の私の動きが非常に悪くて、あまりちゃんと動けてないところもありますので、今後また新大学では一旦仕切り直しになりますけれども、本日もご参加いただいている高橋先生らと相談しながら、よりよい評価、きちんとした質保証ができるように、IR室が支援できるようにというふうな形で進めていきたいと思っています。

各学部、これまでに内部質保証ワーキングのところで、各学部がどんなことに取り組んでいて、どんなところに問題があるかということ、それぞれワーキングの中で報告いただいて、質保証を回しているということでもあります。

6. 教育評価のこれから

最後のスライドです。(章末スライド12を参照)

新大学では、非常に幅の広い新たな学部・研究科で新たな教育カリキュラムが動き始めます。大阪市大では、これまでも当然に異なる理念、教育目標、カリキュラムを持つ様々な学部・研究科のそれぞれの質保証取り組みに重点を置いて、全学では学部・研究科で、同

じょうなことを、これをやれというのではなくて、それぞれの多様なままに支援してきました。

様々なコスト削減が要請される中で、画一化とか効率化ということをすればコストは下がりますけれども、せっかくの総合大学ですので、画一化せず、多様を保つために、ただ、全学としては、一定の方向性を示した上でコストをちゃんとかけながら進めるというふうに、新大学ではそういうことが必要かなと思います。

誰に言えばいいのか分かりませんが、ここにはコストをかけてくださいなのか、かけましょうなのか、分かりませんが、それを強調して、私の報告はここまでにしたいと思います。どうもありがとうございました。

総合大学での学修成果評価

大阪市立大学 副学長
橋本文彦

1

1. PE指標前史
2. PE指標の開発
3. OCU指標（夢）
4. 教育評価方針と教育評価計画
5. 内部質保証WGとIR室の設置
6. 教育評価のこれから

2

PE指標前史

- 経済学部でどのような学生を育てるのか、という教育目標として「Practical Economist」を掲げ、少人数教育による演習と論文指導を中心とした4年一貫のカリキュラム体系を構築した。

←経済学部では特に「資格」などのわかりやすい成果指標がない。
←AP・CP・DPの3ポリシーを策定しながら、そこでDPとして「〇〇を身につけて卒業する」としている成果を、具体的にどの科目でどの程度修得することができるのか、伝えきれていない。

⇒文科省のGP事業の目的は我々の考えと合っているらしい。
⇒応募しようか（落ちてもいいけど）。

3

PE指標の開発

- 大教センターの先生から「何か指標のようなものがあるとよいですね」と言われたので、「PE指標」を作成した。

- A. 学生自身が、今までの大学生活で自分にはどのような能力がどの程度身についたかを知り、自律的に今後の学修を選択できるようにしたい。
 - B. 教員は、自分たちが提供しているカリキュラムが意図通りに学生に受け取られ、その能力が本当に身についているのか、を知りたい。
- しかし、教員にも学生にも従来以上の労力をかけたくない。

- PE指標の「AとBとの双方向性」はOCU指標にも受け継がれている。

4

PE指標の実例

- 別資料（GP総括.pdf）を参照します。

5

OCU指標（夢）

- 「PE指標」はその名の通り、経済学部に特殊・固有の指標であった。
- これを市大の全学や、全国の全学で使える指標に「一般化」したい。

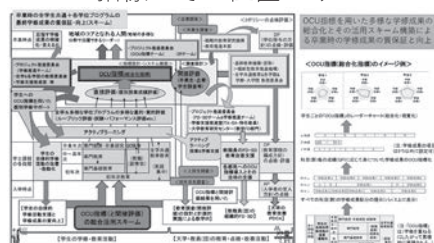
⇒「卒業時の目標」としての「成果」は各学部委ねる。
⇒「指標」は、一つの数値ではなく「レーダーチャートの『形』」としてとらえ、高低や正六角形にこだわらない。
⇒「科目ナンバリング」を利用して、「科目群」毎に成果配分を行う。
⇒OCU指標はあくまでも一つの評価指標であり、他のさまざまな評価と合わせて全学の教育は評価される。

- これを「OCU指標（夢）」と題して全学FD研究会で報告した。

⇒文科省のAP事業と整合しそだったので、応募した。

6

OCU指標とその位置づけ



7

教育評価方針と教育評価計画

※OCU指標は、教育評価における一つのツールでしかない。

⇒何を知るために、何を測定（調査）するのか

- ・教育目標としている能力が本当に身についているのか
- ・学生が身につけたいと思っている能力が本当に身についているのか
- ・提供カリキュラムや学生の学修のコストは適切かなど

⇒調査の対象と調査の間隔

- ・毎年1年生を対象とする調査や、学年進行に従った調査など
- ・全ての学年・学生を対象として全ての調査はコストがかかりすぎる
- ・卒業生や卒業生と接する人を対象とした調査など
- ・状況がそれほど毎年変化するわけではない

8

本学の教育評価方針と教育評価計画

- ・教育評価方針
 - ・別資料（教育評価方針.pdf）を参照します。
- ・教育評価計画
 - ・別資料（教育評価計画.pdf）を参照します。
- ・OCU指標以外のさまざまな調査指標がある。
- ・全学での調査は、教育推進本部からの委嘱を受けて大学教育研究センターが実施

9

教育の内部質保証WGとIR室の設置

⇒調査結果をどのようにして「評価」とするのか

- ・全学主催の調査については、IR室による分析と提言
- ・各学部・研究科（学科等）の個別特徴についてもIR室が支援

⇒評価結果をどのように扱うのか

- ・各学部・研究科代表からなる「教育の内部質保証WG」による検討
- ⇒各学部・研究科のプログラムごとの質保証の取り組みなどを報告

※経営IRや研究IRについては別の機会に報告

10

内部質保証取り組み例

- ・各学部・研究科の内部質保証取り組み
 - ・別資料（各学部・研究科の取り組み.pdf）を参照します。

11

教育評価のこれから

- ・新大学では、新たな学部・研究科で新たな教育カリキュラムが動き始める。
 - ・一方で、現在の一年生が卒業するまでは、大阪市大は存続する。

⇒大阪市大ではこれまでも、（当然に）異なる理念・教育目標・カリキュラムを持つ多様な学部・研究科のそれぞれの質保証取り組みに重点を置き、全学レベルではその支援を中心としてきた。
⇒今後も総合大学ならではの多様性を保てるような教育評価システムを作っていくべき。このためのコストはかけたほうがよい。

12